

アオバトのふしぎ

かとう
加藤 ゆき(学芸員)

平和の象徴として親しまれ、私たちの身近で見られるハト（鳩）。みなさんは世界に何種のハトがいて、国内、神奈川県にどのような種が生息しているかご存知でしょうか。ハトはハト目ハト科に属する鳥類の総称で、ほとんどの種が体に比べて頭が小さく、胸骨、胸筋が発達してずんぐりとした体型をしているのが特徴です。

世界で49属344種（IOC ウェブサイト参考）、国内では在来種に加え野外で繁殖が確認されている外来種2種を含む6属12種が記録されています（表1）。これらのうちオガサワラカラスバトとリュウキュウカラスバトは絶滅したと考えられています。

カワラバトはアフリカ北部から中近東、中央アジア、南アジアにかけて広く分布するハトです。日本には有史以降に導入されたと考えられており、平安時代の書物にも記録が残されています。野外では明治時代以降に記録されるようになり、現在は北海道から沖縄まで、島嶼部を含むほぼ全国で見られます（国立環境研究所ウェブサイト参考）。

神奈川県ではキジバトやアオバトなど4属6種が報告されています（表1）。オーストラリア原産のウスユキバトは野外での繁殖は確認されておらず、日本鳥学会が発行した日本鳥類目録改訂第7版には記載されていません。観察事例が少ないことからペット等の一時的な逸出だと考えられています。カラスバトはかつて横須賀市猿島に多数生息していたとされていますが、現在は他地域も含めて確認されて



図1. キジバト（小田原市）。



図2. カワラバト（小田原市）。

おらず、県内では絶滅したと考えられています。シラコバトは今までに2回の観察事例が寄せられただけの迷鳥です。確認場所が外来とされる集団の生息地域から外れていたため、在来種として扱われています。

このように整理をすると、県内で普段見られるハトは3種ということになります。この中で最も身近なのはキジバト（図1）とカワラバト（図2）です。キジバトは留鳥として県内全域で見られます。林や公園などでくらし、樹上に巣を作り（図3）、周年繁殖をします。カワラバトは「ドバト」とも呼ばれ、県内全域に留鳥として生息しています。平地の住宅地や公園、駅、海岸などで群れて過ごすものが多く（図4）、建物の隙間やベランダなどに巣を作り、

周年繁殖をします。

アオバトは、初夏に森の中で「オーアーオ」という鳴声を聞いたことはあっても、姿を見る機会は少ない鳥です。全身が雌雄共に若草色、オスの肩はブドウ色でよく目立ちます（図5）。県内には主に夏鳥として渡来し、箱根山や



図3. キジバトの巣（○）。矢印部分に親鳥の尾が見える（秦野市）。



図4. 砂浜で休むカワラバトの群れ（大磯町）。

丹沢山地など標高の高い山地の森林でくらしませんが、冬期に残る個体もいて、平地の林や公園などで見られることもあります。普段は森にくらすアオバトですが、春から秋にかけて、大磯町や真鶴町、小田原市などの海岸に飛来し海水を飲むことが知られています。なかでも大磯町照ヶ崎海岸ではまとまった数のアオバトが見られ（図6）、一日あたりの総飛来数は多いときで3,000羽以上、一度に数羽から



図5. アオバト（上：オス 下：メス）。
撮影：川本 孟

表1. 日本及び神奈川県でのハト類の記録。

属名	種名	日本※1	神奈川県※2
カワラバト属	カワラバト(ドバト)	外来種	
	ヒメモリバト	○	×
	カラスバト	○	絶滅
	オガサワラカラスバト	絶滅	×
キジバト属	リュウキュウカラスバト	絶滅	×
	キジバト	○	○
	シラコバト	▲	○
	ベニバト	○	×
キンバト属	キンバト	○	×
アオバト属	アオバト	○	○
	ズアカアオバト	○	×
ヒメアオバト属	クロアゴヒメアオバト	○	×
チョウショウバト属	ウスユキバト	×	一時的な逸出

○在来種 ×記載なし ▲関東北部の個体群は外来種、それ以外の地域では在来種
※1日本鳥類目録改訂第7版(日本鳥学会, 2011)による記録
※2神奈川の鳥2006-10-神奈川県鳥類目録VI-(日本野鳥の会神奈川県支部, 2013)による記録



図6. 大磯町照ヶ崎海岸に飛来するアオバト.

数十羽の群れで飛来し、時として500羽以上の群れが確認されたこともあります。(こまたん ウェブサイト参考)。これらの一部の個体は、追跡調査により20～30 km離れた丹沢山地から飛来することが明らかとなっています。1箇所ですべてだけ沢山のアオバトが観察されることは全国的に珍しく、繁殖期の生息場所として重要であることから、1996年に「大磯町照ヶ崎のアオバト集団飛来地」として県の天然記念物に指定されました。

アオバトの海水飲み行動は、神奈川県に限らず、春から秋にかけて全国から報告があります。海岸環境は様々で岩場のこともあれば砂浜や砂利浜、波打ち際に設置された消波ブロックから飲んだ例もあります。このように、海水飲みは決して珍しいことではないようですが、なぜ海水を飲むのでしょうか。要因の一つはアオバトの食性にあるのではないかと考えられています。

アオバトは繁殖期にあたる春から夏にかけて、ヤマザクラやミヤマザクラ、ミズキ、ノブドウといった水分の多い木の実(液果)を主食とします。一方、冬期の主食は、水分をほとんど含まないシラカシやアラカシなどのドングリ(堅果)です(図7)。この季節によって異なるエサ内容が海水飲みに影響しているのでは、と思いつきにより行われた実験があります。

飼育個体に対し、数種類の液果と共に0.5%食塩水を与えたところ、水道水を与えたときよりも糞の水分量が明らかに少ない傾向が見られました。特にヨウシュヤマゴボウのように水分が多い液果を与えた場合は、塩水と水道水の場合とで大きな違いが出ました。次に

同じ個体に対し、水分量の少ないトウモロコシやえんどう豆、麻の実などが配合された市販のハト餌を与えたところ、塩水よりも水道水を好んで飲み、糞の水分量は少ない傾向が見られました。

水分や栄養分を体内に吸収するためには、血中のナトリウムやカリウムなどの塩分濃度の比率が重要となります。自然下のエサである液果も堅果もカリウムは多く含まれますが、ナトリウムはほとんど含まれません。そのため、液果に含まれる水分や栄養分を吸収するのに必要なナトリウムを得るために海水を飲んでいるのだと考えられています。このほか、卵殻形成や骨格構造の維持に必要なカルシウムを液果から十分に摂取できないので、海水で補っているのだという説もありますが、生理的な実証はされておらず、海水飲みの詳細な理由はまだ分かっていません。

アオバトにとってナトリウムが含まれていれば必ずしも海水でなくてもよいらしく、温泉・鉱泉(図8)や食品工場の排水を飲む事例も知られ、変わったところでは堆肥工場の排水飲みも報告されています。なお、冬期にアオバトの真水飲みは観察されていますが、海水飲みの事例は今まで報告されていません。

アオバトの観察を続けていると「ふしぎ」と



図7. ドングリ(アラカシの実)を食べるアオバト(右の個体). 左の個体はドングリで喉が膨らんでいる(京都市).

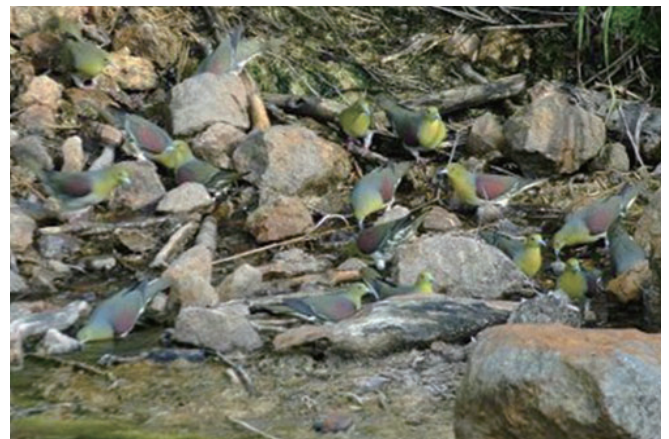


図8. 鉱泉を飲むアオバト(福井県). 撮影:川本 孟

と感じる光景は他にもあります。アオバトはどれくらいの頻度で海水を飲みに来るのか、時おり見せる海水に尾を浸す行動はどのような意味があるのか、丹沢にすんでいる全てのアオバトが照ヶ崎海岸に飛来するのか、冬に見られる個体と夏のものとは同一なのか、寿命はどれくらいなのか、など疑問はつきません。

そのような「アオバトのふしぎ」に興味をもち、調査・観察を続けている団体が「こまたん」です。1983年に設立、「なぜ照ヶ崎海岸にアオバトが飛来し海水を飲むのだろう」という疑問からアオバトの調査をはじめ、今回紹介した海水飲みの実態や丹沢での繁殖の様子、冬のくらしぶり、年齢による鳴声の変化など、さまざまな「ふしぎ」を明らかにしてきました。

今夏、当博物館では、こまたんとの共催で特別展「アオバトのふしぎ～森のハト、海へ行く～」を開催します。展示では、今までのこまたんの調査により解明された「アオバトのふしぎ」を写真や標本を使って紹介します。ぜひご来場ください。